

令和7年平和祈念滋賀県戦没者追悼式 滋賀県遺族会会長 追悼の辞

本日ここに御来賓並びに戦没者御遺族の御参列のもと、県主催による「令和7年平和祈念滋賀県戦没者追悼式」が厳粛に執り行われるにあたり、一般財団法人滋賀県遺族会を代表いたしまして謹んで追悼の辞を申し上げます。

先の大戦では、全国で300万人以上、滋賀県では32,700余柱の御英霊が祖国の繁栄、人々の幸せと家族の安寧を願いつつ散華され礎となりました。

今日の平和と繁栄は幾多の御霊の尊い犠牲の上に築き上げられたものであることを私たちは片時も忘れてはなりません。この悲惨な戦争を二度と再び繰り返すことなく、平和で豊かな今日において、「戦争の悲惨さ」「命の大切さ」「平和の大切さ」を次世代に正しく語り継ぐ事が私達遺族に課せられた責務であると考えております。

父の顔も写真で、あるいは遠い記憶の中でしか覚えておらず、母の苦労を後姿で見ながら、家庭の温かさを夢見ながら育った私達、遺族の歩んできた道は、厳しく苦しい日々で有りました。

戦争遺児の平均年齢も84歳と心身共に超高齢化の波を感じる今日この頃でございます。愛する肉親を失った私達遺族の悲しみは決して尽きるものではありません。

先の大戦が終結し、早80年の節目の年を迎え、今80年の歳月は追悼と哀悼の思いがひとしお胸に迫るものがございます。

さて、今年は、終戦80年を迎えたことを記念して日本遺族会主催で戦没者遺児による慰霊友好親善事業洋上慰霊が実施されました。10代から90代までの218名が6月1日から6月11日の期間、海に鎮まれる30万余柱の御霊に慰霊を捧げると共に、寄港先のフィリピン共和国の方々との友好親善を深めました。6月1日、神戸港に停船中の「にっぽん丸」での結団式が挙行され、神戸市消防音楽隊による送迎演奏や市民による手旗やプレートによる見送り、また、多くの報道陣の取材を受けまして、九州沖を目指し出航いたしました。

3日目には沈没近い海峡で、学童疎開船の対馬丸と戦艦大和で犠牲になられた御霊に黙祷を捧げ、にっぽん丸の汽笛が3回鳴り響きました。

船中では「語り部」研修が数日実施され、「大切な命」と題して父の終焉の地であるフィリピンでの慰霊体験を甘竹日本遺族会常務理事により講演され、最後には「あまモンテンルパの夜は更けて」をみんなで大合唱致しました。感無量の想いでした。

本事業は、高齢化による参加者の減少に伴いまして、今回で終了することとなりま

した。

本船上において、9回の慰霊祭が実施されましたが、それぞれの慰霊実施場所では、各遺族もこれで「終焉か」という想いがあったためか「呼びかけ」「献歌」ではすすり泣きの声があちこちで聞かれました。父の眠る海域で慰霊される遺族が「お父さん」「一緒に酒飲もうや」「腹が減ってるやろ」「腹一杯食べてや」と涙を流しながら、海へ放られるお菓子、饅頭、握り飯、ジュース、お茶、お酒、どれを取っても家から持って来られたものばかりで涙が溢れました。父子、親子の対面「声なき声」との対話であり、より一層、戦争がもたらした悲情さを感じる洋上慰霊でございました。

私の父はビルマ歩兵第128連隊『安』連隊で「モガウン」で19年6月20日戦死しております。本体は『菊』連隊を助けるべく『祭』部隊、『安』部隊がビルマへ召集され、インパール作戦に従軍したものと思われます。「モガウン地域」での戦闘は19年6月21日全滅と書物には記載されております。門司港を出港した際、「航空はがき」が届いていました。私は昭和19年8月11日生まれですので、父は私が生まれていることも知らず戦死しております。私も父とは写真の顔しか知りません。戦争というものはそういうものでございます。

各市町、各地域での追悼式や慰霊祭においても、戦争の傷跡や戦争の悲惨さ、愚かさ等を訴えております。今後も「語り部」活動として私たちは続けていかなければならないと考えております。

今回、追悼式を挙行して頂きました滋賀県知事 三日月大造様をはじめ、御来賓各位に深く感謝申し上げますと共に、御参会賜りました御遺族様の御健康と御多幸を心から御祈念申し上げます。

戦没者の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げまして、「追悼の辞」と致します。

令和7年8月30日

一般財団法人 滋賀県遺族会

会長 松浦 友一